

赤色の四本柱と土俵の四方位

根 間 弘 海*

1. 本稿の目的¹

安政5年1月場所以降、四本柱は基本的に四色である。土俵の四方位も四色によって決まっている。すなわち、東は青色、南は赤色、西は白色、北は黒色である。ところが、安政5年以前の四本柱は基本的に赤色なので²、どの柱がどの方位を表すか、一見しただけではわからない。

本稿の目的は土俵の方位が定まっていたのかどうかを調べ、方位は『相撲家伝鈔』（正徳4年〈1714〉）以降安政5年（1858）の四色導入まで定まっていたと主張することである³。したがって、方位は現在まで定まっていたことになる。方位は定まっていたが、東西南北の捉え方は、もちろん、明治42年（1909）6月を境に変化している。調査の資料は錦絵を基本にしているが、文字資料もときおり参考にしている。活用した錦絵は、本稿の末尾に「資料：錦絵と分析」として示してある。

土俵の方位を見きわめるために、本稿では次の6つの視点から分析している。

- | | |
|------------------|----------------|
| (1) 東西南北の方位 | (2) 水引幕の巻き方と方位 |
| (3) 水桶と力紙の方位 | (4) 弓具柱の方位 |
| (5) 対戦する力士の番付と方位 | (6) 中改の柱と方位 |

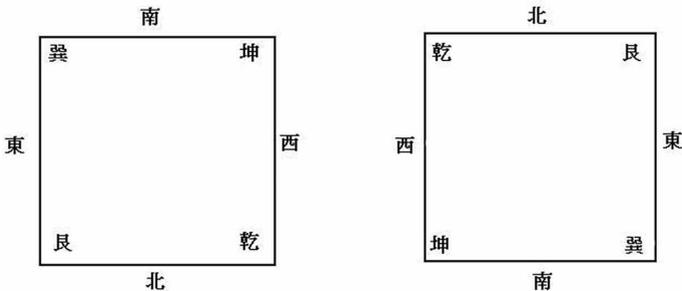
*専修大学名誉教授

これまで安政5年以前の四本柱の方位が定まっていたことを明確に主張した論考はない。本稿が初めての試みである。6つの視点から錦絵を吟味して四方位が定まっていたことを主張しているが、少し大胆な主張かもしれないという危惧もある。錦絵を一つの視点から分析しても、それに反するものがときおり存在する。方位を決めるときは、一つの視点だけでなく、他の視点も加味している。一つの視点だけを強調すれば、たとえば、方位は「南」となるが、他の視点を考慮すれば「北」と判断できることもある。

本稿では錦絵を資料としているが、それは必ずしも事実を正しく描いているとは理解していない。絵師は意図して構図上事実反することを描くこともある。錦絵ではどれが真実で、どれがそうでないかを見きわめることが大切である。それによって分析が異なることもある。見方が変われば、分析も変わる。そのことを強調しておきたい。

2. 東西南北の方位

(1) 錦絵では妻面が南北に、平面が東西になっている。南には役棧敷があり⁴、北には行司が控えている。南から見て右手が東になり、左手が西になる。北から見れば、その逆の方位になる。つまり、行司の左が東になり、右が西になる。北側の右手が乾、左手が艮、向こう左手が巽、右手が坤である。これを図で示せば、次のようになる。



(2) 役棧敷がある方位が南である。そこは正面となる。南が正面であることは、『相撲家伝鈔』の図形にも明記されている。したがって、錦絵で役棧敷が描かれていれば、その方位が南だということが容易にわかる。その反対側が北となり、そこには行司が控えている。それも『相撲家伝鈔』の図形に明記されている。

(3) 屋形が描かれていると、南北の見分けは簡単である⁵。妻面が南北で、平面が東西である。これは明治42年6月の国技館開館時まで続いていた。錦絵ではすべてと言っていいくらい、妻面が南北の方位で描かれている。南北は決まっているようなものと言っても過言ではない。判別すべきは、どの方位が「正面」（つまり南）になり、「正面裏」（つまり北）になるかである。東の方位から見た錦絵としては、たとえば「江都大相撲浮絵之図」（天明2年2月）がある⁶。この錦絵では妻面が東西になり、平面が南北になっている。したがって、妻面は南と北の両方とも見えない。

(4) 土俵入りを描いてある錦絵では、行司の姿から南北のどちらを向いているか、判別できることがある。行司が蹲踞して背を向けていれば、北から南を見ていることになる。行司の顔の正面が描かれていれば、南から北を見ていることになる。行司の格好だけでは南北を見分けることができないこともある。また、役棧敷が描かれているか否かによって、北から見ているか、南から見ているかを判別できることもある。しかし、それはヒントになっても、すべてではない。特に、役棧敷がない場合、南北の判別は難しい場合がある。その場合には、弓を括り付けてある柱、水桶、力紙などの用具などを参考にして判別することになる⁷。

(5) 錦絵では全体として東西南北の見分けは容易である。役棧敷が描かれていない場合は、それ以外の要素を参考にして判別することになる。土

俵だけをクローズアップして描き、土俵周辺の情景を描いてない錦絵もある。そういう場合でも、やはり力士の体の向きや行司の描き方などを参考にしながら判別する。しかし、絵師が事実を正しく描いていないと判断せざるを得ない場合がある。そういう場合には、判断する要素がどの方位なのかを見きわめなければならない。

3. 水引幕の巻き方と方位

(1) 水引幕は北の乾から巻き始め、東の艮、南の巽、西の坤、そして乾で巻き納める。この巻き順序は『相撲家伝鈔』（正徳4年）の時代から現在まで同じである。しかも、右方向に巻いていく。つまり、北の乾が決まれば、四方位は決まったことになる。これを確認したければ、たとえば、木村政勝著『古今相撲大全』（宝暦13年）、木村左右馬著『相撲伝秘書』（安永5年）、好華山人著『大相撲評判記』（天保7年）、式守幸太夫記『相撲金剛伝』（別名『本朝角力之起原』、嘉永6年）、彦山光三著『相撲読本』（昭和27年）、同著『相撲道綜鑑』（昭和52年）、金指基著『相撲大事典』（pp. 314-5、平成14年）、内館牧子著『女はなぜ土俵にあげられないのか』（平成18年）などがある⁸。元立呼出しの拓郎を始め、現役呼出し5名に40代式守伊之助と幕内行司・木村元基を介して尋ねてもらったところ、水引幕は黒柱を起点に青柱、赤柱、白柱、黒柱という順序で巻くという返事をいただいた⁹。この巻き方の伝統は少なくとも『相撲家伝鈔』（正徳4年）の頃から現在まで持続されているに違いない。

(2) 錦絵では水引幕の巻き方を確認できない。したがって、錦絵は方位の確認には役立たない。しかし、どの柱が乾の柱になるかを他の要素から識別できれば、他の柱の方位も自動的に識別できる。たとえば、『相撲伝秘書』には北の柱を「乾」としている。したがって、北の方位がわかれば、

その左の柱は艮である。右方向に北，東，南，西となるからである。錦絵では，実は，乾柱を見つけることは比較的容易である。東西を見つけ，その後南北を見分けるとよい。北柱が見つければ，それを起点に右回りに方位を順序良く決めることになる。

4. 水桶と力紙の方位

(1) 水桶は柱の近く，力紙はその柱に結び付けてある¹⁰。錦絵では水桶は確認できるが力紙は描かれていないこともある。その逆もある。それは省略法によるものである。本稿では，水桶は北側の左右の柱付近に備えて置くという立場である¹¹。北側に備えてある錦絵が圧倒的に多いからである。南側の左右の柱に水桶や力紙がある錦絵もあるが，それは絵師が構図上そのように描いてあると判断している。また，上覧相撲（たとえば堺市博物館制作『相撲の歴史』の絵巻，寛政3年6月）では，多くの場合，水桶や力紙が東西の対角に備えられている。勸進相撲でもわずかながらそのような錦絵（たとえば享和元年8月の「京都鴨川角舩図」，京都相撲）がある¹²。勸進相撲で，実際に，水桶や力紙が南の左右の柱に備えてあったり，東西の対角に備えてあったりしていたならば，本稿の方位の分析には大きな誤りがあることを認めなければならない。本稿では水桶や力紙の配置に一定の方位があり，それは北側の左右の柱だったとしているからである。

(2) 『古今相撲大全』（宝暦13年）の絵図を見ると，水桶と力紙は正面（南側）の左右の柱となっている¹³。また，同書の項「力水の清浄並びに化粧紙の近例」でも「左右」に置くようになっている。

- ・「(前略) 二つの水桶を左右（今でいう東西）に分け，終日相撲取りに与える。相撲取り咽中を潤す。(中略) 今は化粧水という。」

- ・「(化粧紙は：本稿補足) 正面の四本柱の左右の柱に吊り置き、相撲取りこれを使い用いる (後略)」

『古今相撲大全』の「正面」が南の方位を指しているかどうかははっきりしないが、のちの天明期の錦絵を見ると、水桶と力紙は北側(行司控え)に変わっている。何時からそのように変わったかは不明である。錦絵では北側が圧倒的に多いが、南側が描かれているものも少しはある。水桶の位置は南側と北側のどちらでもよかったのか、たまたま絵師が南側に描いてしまったのか、それも不明である。

(3) 一人土俵入りや力士の取組などの場合、顔の向きが南(正面)を向いている場合、水桶や力紙の有無は南から見ているか、北から見ているかの判断材料になることがある。正面を見ているのに、南の左右の柱に水桶や力紙があると、錦絵は真実を伝えていないはずだという判断になる。もし水桶や力紙が南の左右の柱にも配置されていたなら、本稿は大きな誤った判断をしていることになる。特に天明期から寛政期にかけては水桶と力紙の方位が一定でないことから、それが事実だったのかどうかを検討する必要がある。

5. 弓具柱の方位

(1) 文政12年春場所より弓具を結い付ける柱は良柱である。隔日に坤柱に結い付けるしきたりがあったならばその柱にもありそうだが、安政4年冬場所までそのような例は見当たらない¹⁴。たまたま坤柱に弓具を結い付ける錦絵がないのかもしれないが、一つも見つからないというのは不思議だ。もし今後一つでもそのような錦絵が見つければ、隔日に良柱と坤柱に結い付けるしきたりがあったことの証拠となる。安政4年冬場所以降は良

柱が圧倒的に多いが、坤柱も描かれている。隔日に出掛けの柱に結び付けるといふしきたりがあったに違いない。問題は、いつから隔日に2本の柱に結び付けるようになったかである。

(2) 文政9年以前には弓具を括り付ける柱は固定していない。坤柱は非常に少ないが、他の3本の柱（つまり乾柱、艮柱、巽柱）には同程度の数で弓具が括り付けられている。つまり、弓具を括り付ける柱は「出掛け」とは関係ない。もし出掛けと関係あれば、東の左右いずれかの柱、西の左右いずれかの柱は固定していたはずである。東と西の左右いずれの柱も同程度の数である。坤柱が非常に少ないことから、その柱は除外するという決まりがあったかもしれない。その基準は、今のところ、不明である。1本の柱でも除外したことが事実なら、土俵の四方位は定まっていたことになる。

(3) もう一つの見方としては、出掛けによって東西になっていたとすれば、東は艮柱か巽柱のいずれかが正しいかもしれない。西は圧倒的に乾柱なので、隔日に弓具を括り付けるのはその柱となる。東ではなぜ艮柱と巽柱の両方が見られるのだろうか。これは絵師がたまたま事実を描いていないとしか言いようがない。東はどの柱でもよいという考えは一貫性がないからである。これは、もちろん、出掛けによって弓具の柱を変えていたということを前提としている。その前提が崩れれば、東西の柱が決まっていたという考えも成り立たないことになる。

(4) 『古今相撲大全』（宝暦13年）に次のように書いてある¹⁵。

「この弓は四本柱のうち出掛けの正面の乾の柱に結び付け置きしが、近代出掛けの柱に結び付け置く」

天明期にもこの「しきたり」が適用されていたと想定しているが、錦絵ではそれは正しく適用されていない。いずれの柱にも同程度に弓具が括り付けられているからである。そのことは何を意味しているのだろうか。一つは、弓具を括り付ける柱は決まっていたが、錦絵にはそれが反映されていない。もう一つは、弓具を括り付ける柱は決まっておらず、どの柱でもよかった。本稿では、弓具を括り付ける柱は決まっていたと考えている¹⁶。なぜなら、構図が酷似している錦絵を比較すると、見る方位によって弓具を括り付ける柱も異なっているからである。

(5) 弓具と幣帛を一緒に括り付けるようになったのは、文政12年春場所からである¹⁷。それまでは、弓具と幣帛は別々の柱に括り付けるのが普通だった。弓具と幣帛を一緒に括り付けてある錦絵は例外的である（たとえば、寛政3年6月の「谷風・小野川横綱土俵入りの図」）。弓具と幣帛を別々にする場合、括り付ける2本の柱に決まりがあったかもしれないが、本稿ではそれを深く調べていない。いずれにしても、別々の柱に括り付けるのに意味があったのか、それを一つの柱に括り付けるようにしたことに意味があったのか、今のところ、不明である。本稿では問題提起だけにとどめ、その解明は今後の課題としておきたい。

6. 中改の柱と方位

(1) 錦絵を調べると、たとえば、中改の人数の変化、弓具を括り付ける柱、力士が土俵に上がる位置なども指摘できることがある。たとえば、中改は天明期から文化13年2月までは2人、文化14年1月から弘化2年11月までは3人、弘化3年3月以降は4人である。言うまでもないが、錦絵では中改は常に描かれているわけではない。中改を描くか否かは絵師の判断による。しかし、人数が決まってからは、土俵場でその人数の中改が柱を

背にして座っていたに違いない。

(2) 池田雅雄著『大相撲ものしり帖』(p.205) や金指基著『相撲大事典』(p.251)によると、中改制度が寛政期にでき、2, 3人になったと記述してあるが、3人を錦絵では確認できなかった¹⁸。土俵で四本柱を背にして座っている年寄が「中改」だとすると、天明期から文化13年頃までずっと2人である。寛政期に3人描かれた錦絵が将来見つかるかもしれないが、それは単発的なものであろう。というのは、当時の錦絵では寛政の初めから終わりまで中改は2人だけしか描かれていないからである。

(3) 中改が2人だった頃、錦絵を見るかぎり、背にしている柱の方位は定まっていない。巽柱は非常に少ないが、他の3本の柱はほとんど同じ数である。3人の場合は乾柱、艮柱、巽柱が多いが、坤柱も描かれている。2人の場合も3人の場合も、中改の方位が定まっていないのはなぜなのだろうか。中改は重要な地位と権威があり、そのような人物の座る柱の方位も定まっていたはずだが、錦絵ではその柱の方位が定まっていないのである。絵師が事実を正しく描いていないのか、もともと柱の方位は定まっていなかったのか、今のところ不明である。これは今後解明すべき課題の一つである。

7. 対戦力士の番付

(1) 力士の取組を描いた錦絵ではその力士の番付で東西を判別できることがある。昔は、左（西）を右（東）より優位に描く傾向があるからである。たとえば、南から錦絵を見た場合、西方力士と東方力士を比較し、優位の力士が西方に描かれていることがある。西が優位なので、そこに描かれている力士が番付では上位になる。土俵の東西が現在のようになったの

は明治42年6月以降である¹⁹。

(2) 錦絵に西方と東方の番付が記されていることもある。それを参考にしながら、対戦する力士が左右のどちらに描かれているかを見極めるのである。番付の優劣に加え、周囲の情景を考慮すればよい。取組では行司がともに描かれているので、その行司や力士の顔の向きを考慮する。また、弓具や水桶が備え付けられている方位を参考にすることもある。

(3) 力士の取組を描いてある錦絵では土俵の一部だけが描かれていて、その周囲が何も描かれていないことがある。そういう場合は、土俵の東と西を判別するとき、番付が手掛かりとなることがある。それに加え、南と北のどちらから見ているかを判別するとき、力士の顔の向きが手掛かりとなることもある。

8. 今後の課題

本稿では土俵の方位は『相撲家伝鈔』（正徳4年）から安政5年まですでに定まっていたという主張をし、それを証明するために錦絵を6つの視点から分析している。視点のすべてを満たさなくても、いくつかの視点の適用から方位が定まっていたとしている。その主張が間違っているとすれば、それぞれの視点の適用が間違っていたことになる。

本稿では、錦絵に描いている相撲は基本的に変化していないという前提である。その前提が正しいかどうかは、今後検討しなければならない。視点が定まっても、分析の対象に何らかの変化があったならば、分析そのものが間違っているからである。分析の対象が変化していれば、分析はその変化を反映しなければならない。しかし、本稿ではそのような変化の可能性を示唆しながらも、基本的には変化していないという立場である。

たとえば、水桶や力紙を備える柱の方位は現在と同じだったのだろうか。それとも何らかの変化があったのだろうか。本稿ではそのような変化をまったく考慮せず、天明期から同じ配置だったという捉え方をしている。もし変化があったなら、いつの時点で変化したのかを調べなければならない。錦絵では、実際、水桶や力紙の配置は一つではない。絵師の判断で配置が異なるのか、それとも実際に異なっていたのか、さらに検討してみる必要がある。

土俵の四本柱を背に座っている「中改」の人数は、2人から3人を経て4人になっている。たとえば、2人だったとき、座る四本柱の方位は定まっていたのだろうか。それともそうでなかったのだろうか。中改の制度があった以上、座る柱の位置は定まっていたとみるのが自然である。しかし、天明期から文化13年ごろの錦絵を見るかぎり、座る柱の位置は定まっていない。錦絵は真実を反映しているのだろうか、それともそうでないのだろうか。真実はどうだったのか、今のところ、不明である。本稿の分析には何らかの見落としがあるかもしれない。それが何であるかを今後吟味する必要がある。

本稿の分析は一つの試みである。分析を提示しながら、解明すべき課題も提示している。本稿の分析に問題があるかもしれない。複数の視点を考慮して分析しているが、その視点が揺るぎないものかどうかははっきりしないからである。現段階では、この程度の分析しか提示できなかったというのが真実である。これまで赤色の四本柱と方位の関係に着目し、それを深く研究した論考がなかった。本稿が初めてその関係を6つの視点で検討している。分析には最善を尽くしたが、解明したい課題があることも事実である。

本稿の分析が一つのきっかけとなり、さらに研究が進展することを期待している。

注

- 1 本稿をまとめていく段階で、いつものように40代式守伊之助に大変お世話になった。特に錦絵の分析や相撲の歴史の変遷などについて語り合った。未解決の問題が多いだけに意見はいろいろあったが、本章の主張はすべて、私の責任であることを記しておきたい。水引幕の巻き方では40代式守伊之助と幕内行司・木村元基に仲介を依頼し、知り合いの元立呼出しや現役呼出しなどに確認してもらった。相撲博物館にも錦絵の閲覧や確認でお世話になった。これらの方々に改めて感謝の意を表す。
- 2 赤色が普通だが、紅白色の四本柱もときおり見られる。本稿では基本的に「赤色」としているが、紅白色でも土俵の方位はわからない。
- 3 本稿では正徳以前の四本柱については触れないが、実際は寛永8年(1631)頃にもすでに土俵の方位は定まっていたに違いない。たとえば、『相撲行司絵巻』の二枚の絵図には四本柱が四色で描かれている。この絵図に関しては、拙著『大相撲行司の松翁と四本柱』(2013)の第7章「安政5年以前の四本柱」でも少し扱っている。吉野裕子著『陰陽五行と日本の民俗』(1983)によると、陰陽五行の思想は7世紀にはすでに日本に導入されている(pp.20-4)。土俵の四本柱の方位と四時五行説の密接な関係は、四本柱が土俵に導入された頃にはすでに確立していたかもしれない。
- 4 錦絵では役棧敷を天明2年(1782)初期から明治36年(1903)あたりまで確認できる(たとえば、明治中期なら『相撲百年の歴史』(p.93)や『大相撲人物大事典』(p.300))。したがって、役棧敷が南の方位にあったとすれば、正面は明治期までも変わっていない。正面が北の方位に変わったのは明治42年6月の国技館開館時である。正面の位置や東西南北は入れ替わったが、四本柱の配色の位置は以前と変わらなかった。役棧敷は明治42年2月場所までであったかもしれないが、これはまだ確認していない。
- 5 屋形に関しては、拙著『大相撲に見る秘話とその検証』の第4章「土俵の屋根」にも詳しく述べている。昭和6年(1931)に現在の神明造りに変えている。従来は妻面が南北だったが、昭和6年以降は平面が南北になっている。そのようになった理由を文献で確認できていないが、おそらく伊勢神宮を模倣したからではないだろうか。伊勢神宮の正面は平面になっているからである。
- 6 東や西から見て描いたと思われる錦絵は、安政5年以前には非常に少ない。もしかすると、東や西から見て描いているが、屋形だけを南北に描いているのかもしれない。そういう疑念がないわけでもないが、本稿では屋形の描き方から、妻面を南北とし、平面を東西としている。
- 7 弓具や水桶を備える柱が決まっていなかったなら、方位を決めることはできない。本稿ではその方位は決まっていたと解釈している。これは、実は、大きな問題で、弓具や水桶を備える柱の方位は寛政あたりまでは決まっていなかったかもしれない。それは今後吟味する必要がある。
- 8 木村喜平次著『相撲家伝鈔』から現在に至る相撲の本では水引幕の巻き方は一定している。どの本を開いてもその巻き方に違いはない。その巻き方を実際に見たかどうか

- かは明確でないが、巻き方の伝統はずっと維持されてきたに違いない。内館女史はその巻き方を実際に見ている。私は水引幕のことをよく知っている元立呼出しにもその巻き方を確認した。
- 9 明治42年6月に国技館開館時には水引幕の巻き方が異なっていたという。つまり、赤から始まり、白、黒、青となり、赤で巻き終えたという。これは、もちろん、吉田司家の独自の方位に基づいている。いつからそのような巻き方になり、国技館開館後のいつの時点で現在の巻き方に復帰したかも不明である。
- 10 水桶は柱の近くに、力紙はその柱に結び付けるが、説明の便宜上、「同じ柱」あるいは「同じ柱の方位」と表すこともある。水桶と力紙は常に一緒だが、水桶は柱の近く、力紙は柱に結び付けてある。
- 11 錦絵を見るかぎり、水桶と力紙が北の左右の柱（乾柱と艮柱）に定まっているのは文化10年以降である。それまでは必ずしも定まっていない。これをどう解釈すればよいか、今のところ、わからない。何らかの変化があったかもしれないが、それを不問に付している。
- 12 水桶と力紙を備えておく柱の位置が上覧相撲や御前相撲と勸進相撲とで異なっていたかどうかは必ずしも確かでない。また、上覧相撲で水桶と力紙が常に対角の柱だったかどうかは確かでない。残念なことに、江戸時代の上覧相撲の土俵をすべて、絵図では確認できない。
- 13 行司は正面（南）を向いて蹲踞している。南の右の柱（巽柱）に水桶と力紙が備えてある。これが真実を正しく反映しているかどうかは不明である。絵図の屋根の向きも普通の錦絵と違っている。妻面が南北になるはずだが、平面になっている。『古今相撲大全』は宝暦期の写本なので、この絵図に関しては深く立ち入らないことにする。
- 14 弓具を括り付ける柱に関しては、拙著『大相撲行司の松翁と四本柱の四色』の第4章「役相撲の矢と扇子」でもやや詳しく説明しているが、天明期から安政の頃の弓具に関しては詳しい説明をしていない。錦絵を見るかぎり、出掛けにより隔日に弓を括り付ける柱の位置が決まっていないからである。なお、『東京朝日新聞』（明治42年6月3日）の「式前の土俵」や吉田長孝著『原点に還れ』（p.64）によると、明治42年6月の国技館開館時には吉田司家により南の赤柱に弓具を括り付けているが、それは吉田司家独自の方位に基づいているようだ。吉田司家独自の方位に関しては、たとえば彦山光三著『土俵場規範』（pp.79-80, 昭和13年）や笠置山勝一著『相撲範典』（pp.130-1, 昭和17年）にも言及されている。本稿では吉田司家独自の方位に関してはそういう方位もあったことを述べるだけに留める。
- 15 明治以降、弓具を括り付ける柱に関しては、たとえば、塩入太輔編『相撲秘鑑』（p.19, 明治19年）、三木愛花著『相撲史伝』（pp.203-4, 明治34年）、同著『江戸時代之角力』（pp.108-9, 昭和3年）、大ノ里萬助著『相撲の話』（pp.14-5, 昭和5年）、秀ノ山勝一（元笠置山）著『相撲』p.35, 昭和25年）、彦山光三著『相撲読本』（p.79, 昭和27年）などがある。

- 16 弓具は「役柱」に括り付けると考えていたが、錦絵を見るかぎり、括り付けてある柱は一定していない。つまり、役柱の方位は柱の方位では見分けがつかない。弓具を役柱に括り付けるとする考えは間違った思い込みなのだろうか。これも今後検討する必要がある。
- 17 本稿では紙幣、幣束、幣串、御幣であろうと、その種類を区別することなく、柱に括り付けてある幣を「幣帛」として表す。実際は、幣の種類によって何らかの区別があったかもしれない。土俵祭で使用される幣は7本が普通だが、幣の形状は違っていてもいいかもしれない。それに、本場所では常に7本の幣が使用されたのか、八幡幣1本のときはなかったのか、何本かの幣と八幡幣を一緒に使用しなかったかなど、幣の使用に関しても問題意識はあったが、それを調べることはしなかった。
- 18 寛政期に中改に関する制度が導入されたことを示す文字資料を探したが、残念ながら見つからない。寛政期の錦絵には3人座っている錦絵は見つからない。制度であれば、3人座っている錦絵が継続的に現れるはずである。文化13年ごろに2人から3人に変更されたのではないだろうか。
- 19 番付と錦絵の関係については、香山磐根筆「相撲錦絵の吟味—四本柱の色の変遷」(『相撲趣味』第89号、昭和60年8月、pp.6-7)が詳しい。
- 20 〈末尾の「資料・錦絵と分析」の(20)の注)天明以前の享和17年頃、絵図「四角土俵相撲の図」(堺市博物館制作『相撲の歴史』の表紙図)でも水桶は坤柱と艮柱(対角の柱)に配置されている。この絵図は南部相撲を描いたものとよく指摘される。それが正しければ、かなり簡略化されたものである。これに関しては、拙著『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』(2013)の第9章「謎の絵は南部図でもない」でも論じている。

参考文献

雑誌や新聞等は本文の中で詳しく記してあるので、ここでは省略する。

池田雅雄(編),『写真図説 相撲百年の歴史』,講談社,1970(昭和45年)。

池田雅雄,『大相撲ものしり帖』,ベースボール・マガジン社,1990(平成2年)。

岩井左右馬,『相撲伝秘書』,1776(安永5年)。

岩井播磨掾久次・他(伝),『相撲行司絵巻』,1631(寛永8年)。天理大学善本叢書の一つ。

内館牧子,『女はなぜ土俵にあがれないのか』,幻冬舎,2006(平成18年)

『江戸相撲錦絵』(『VANVAN 相撲界』,新春号),ベースボール・マガジン社,1986(昭和61年)。

大ノ里萬助,『相撲の話』,誠文堂,1930(昭和5年)。

笠置山勝一,『相撲範典』,博文館内の野球界社,1942(昭和17年)。

金指基,『相撲大事典』,現代書館,2002(平成13年)。

- 木村喜平次、『相撲家伝鈔』, 1714 (正徳4年)。
- 木村政勝、『古今相撲大全』, 1763 (宝暦13年)。
- 好華山人、『大相撲評判記』, 河内屋長兵衛・他, 1836 (天保7年)。
- 埼玉県立博物館 (編), 『特別展 相撲』, 埼玉県立博物館, 1994 (平成6年)。
- 堺市博物館 (制作), 『相撲の歴史』, 堺・相撲展示実行委員会, 1998 (平成10年)。
- 酒井忠正, 『日本相撲史』(上・中), ベースボール・マガジン社, 1956 (昭和31年) / 1964 (昭和39年)。
- 塩入太輔 (編), 『相撲秘鑑』, 巖々堂, 1886 (明治19年)。
- 式守幸太夫, 『相撲金剛伝』(別名『本朝角力之起原』), 1853 (嘉永6年)。
- 『相撲浮世絵』(別冊相撲夏季号), ベースボール・マガジン社, 1981 (昭和56年) 6月。
- 『相撲浮世絵』(大谷孝吉コレクション), 発行者・大谷孝吉, 1996 (平成8年)。
- 『図録「日本相撲史」総覧』, 別冊歴史読本, 新人物往来社, 1992 (平成4年)。
- 土屋喜敬, 『相撲』, 法政大学出版局, 2017 (平成29年)。
- 『どすこい～出雲と相撲』, 鳥根県立古代出雲歴史博物館, 2009 (平成21年)。
- 戸谷太一 (編), 『大相撲』, 学習研究社, 1977 (昭和52年)。本稿では「学研」として表す。
- 根間弘海, 『大相撲行司の軍配房と土俵』, 専修大学出版局, 2012 (平成24年)。
- 根間弘海, 『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』, 専修大学出版局, 2013 (平成25年)。
- 根間弘海, 『大相撲行司の松翁と四本柱の四色』, 専修大学出版局, 2020 (令和2年)。
- 南部相撲資料 (『相撲極伝書』, 『相撲故実伝記』, 『相撲答問詳解抄』など。他に相撲の古文書が数点ある)。
- 彦山光三, 『土俵場規範』, 生活者, 1938 (昭和13年)。
- 彦山光三, 『相撲読本』, 河出書房, 1952 (昭和27年)。
- 彦山光三, 『相撲道綜鑑』, 日本図書センター, 1977 (昭和52年)。
- ビックフォード, ローレンス, 『相撲と浮世絵の世界』, 講談社インターナショナル, 1994 (平成6年)。英語の SUMO and the Woodblock Print Masters (by Lawrence Bickford) である。
- 秀ノ山勝一 (元笠置山), 『相撲』, 旺文社, 1950 (昭和25年)。
- 松本平吉, 『角觚秘事解』, 松壽堂, 1884 (明治17年)。
- 三木愛花, 『相撲史伝』, 1901 (明治34年) / 『増補訂正日本角力史』, 吉川弘文館, 1909 (明治42年)。
- 吉田長孝, 『原点に還れ』, 熊本出版文化会館, 2010 (平成22年)。
- 吉野裕子, 『陰陽五行と日本の民俗』, 人文書院, 1983 (昭和58年)。

資料：錦絵と分析

資料の錦絵はほとんどすべて公刊されている相撲の本に掲載されている。資料提示の仕方としては、便宜的に、3分割してある。土俵上で柱を背に座っている年寄を「中改」と捉え、その人数に応じてそれぞれ年代順にリストアップした。天明期に「中改」という言葉があったかどうかはわからないが、親方の役割が同じであることから「中改」という用語をそのまま適用してある。

なお、錦絵には四本柱に脇差を括り付けてあることが頻繁に見られるが、それは分析の対象から除外してある。土俵を構成する必須な用具とは捉えていないからである。

A. 中改が2人の錦絵

(1) 天明2年2月,「谷風と小野川の取組」,春好画,酒井著『日本相撲史(上)』(p.147)。

南から見た図。弓具・艮柱,幣帛・乾柱。水桶・艮柱付近。力紙は艮柱に結び付けられている。

(2) 天明2年2月,「江都大相撲浮絵之図」(小野川と谷風の取組),春章画,『相撲百年の歴史』(p.51)／「相撲」編集部編『大相撲人物大事典』(p.68)。

東から見た図。南に役数あり。弓具・乾柱(手前左),幣帛・坤柱。中改・1人(乾柱),艮柱にはいないが,坤柱と巽柱は不明。役数土俵の左側に描くのは非常に珍しい。そのため,屋根の平面が東西になっている。このような錦絵はめったにない。普通は,屋根の妻面が南北になっている。

(3) 天明2年10月,谷風と小野川の立会いの図,春章画,『相撲百年の歴史』(p.61)／学研『大相撲』(口絵)。

南から見た図。弓具・坤柱。幣帛・不明。中改・不明。坤柱の近くにいる人は呼出しで扇子を持っているし,巽柱の近くにいる人は力士である。谷風が左に,小野川が右に描かれているが,これは番付を反映している。左方が土俵の左に描かれている。行司も正面を向いている。水桶と力紙が南の左端(坤柱)と右端(巽柱)近くに備えてあるが,これは本来なら北にあるはずだ。おそらく,絵の構図上,南に移して描いたに違いない。すなわち,事実と反した絵が北である。堺市博物館制作編『相撲の歴史』(p.35)では天明2年春場所としているが,番付と照合すると10月場所が正しいようだ。ピックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.72)では天明2年11月としている。

(4) 天明3年3月,宮城野と筆ノ海の立会い,春章画,酒井著『日本相撲史(上)』(p.160)。

南から見た図。役数は見えない。弓具・巽柱(手前右),幣帛・坤柱。中改・描か

れていない。行司・無草履。

(5) 天明3年(月名は不明),東西幕内土俵入之図,春章画,『どすこい』(p.35)／『相撲百年の歴史』(p.60)／金指基著『相撲大事典』(p.62)。

南から見た図。弓具・坤柱(手前左),幣帛・艮柱。四本柱は紅白色。中改・描かれていない。行司は本来なら北の二字口で背を向けているはずだが,顔がはっきり描かれている。弓具が南の坤柱に描いてあるのは事実には反しているはずだ。『相撲百年の歴史』(p.60)では天明2年10月となっている。

(6) 天明4年3月,「江都勸進大相撲浮絵之図」,春章画,『相撲百年の歴史』(p.11)／ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.80,図23,25)。

南から見た図。弓具・艮柱(向こう右),幣帛・乾柱。中改・2人(坤柱と乾柱〈両隣の柱〉)。行司・無草履。堺市博物館制作『相撲の歴史』(p.36)では天明8年春場所としているが,行司が無草履であることから天明7年以前の錦絵に違いない。この画題と酷似する画題の錦絵はいくつかあるが,水桶は北の左右の柱付近にあり,力紙もその柱に結び付けてある。

(7) 天明4年11月,「江都勸進大相撲浮絵之図」,春章画,ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.80,図24)。

南から見た図。弓具・艮柱(向こう右),幣帛・乾柱。中改・2人(坤柱と艮柱〈対角の柱〉)。行司・無草履。弓具を結び付けてある柱も重要なヒント。弓具は艮柱に結び付けてあることから,南から見ていることになる。

(8) 天明6年11月,「日本一江都大相撲土俵入後正面之図」(土俵入り),春章画,ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.26)／『江戸相撲錦絵』(p.7)。

北から見た図。役数あり。弓具・乾柱(手前右),幣帛・艮柱。中改・不明。乾柱と艮柱にはいないが,他の坤柱と巽柱は陰になっている。北側に袷姿の行司が描かれている。他の酷似する図柄では南側から見ているので,行司の姿は描かれていない。『江戸相撲錦絵』(p.7)では天明7年となっている。

(9) 天明8年4月,「幕内土俵入り」,春好画,『相撲百年の歴史』(p.10)。

南から見た図。弓具・不明,幣帛・乾柱。四本柱は紅白色。中改・描かれていない。行司の顔は南を向いている。南の巽柱に力紙があるが,これは事実を正しく反映しているだろうか。そうではないはずだ。本稿では力紙は北の柱に備えるという立場である。

(10) 天明年間,「新版浮絵大相撲興行之図」,豊春画,『相撲浮世絵』(p.161)／『相撲百年の歴史』(p.60)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・巽柱（向こう左）、幣帛・坤柱。四本柱は紅白柱。中改・2人（艮柱と乾柱〈両隣の柱〉）。行司・無草履。水桶が艮柱（北）近くにある。その柱に力紙も結び付けてある。

(11) 寛政2年11月、「江都勸進大相撲浮絵之図」(谷風と小野川の取組)、春章画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.89, 図36)。

南から見た図。弓具・艮柱（向こう右）、幣帛・乾柱。中改・2人（坤柱と艮柱〈対角の柱〉）で、乾柱と巽柱には中改はいない。行司・草履。

(12) 寛政2年11月、谷風と小野川の立会い、春好画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.91)。

南から見た図。役棧敷なし。弓具・艮柱（向こう右）、幣帛・乾柱。中改・描かれていない。両力士の仕切りで、行司は南を向いている。谷風は左（西）、小野川は右（東）に描かれている。

(13) 寛政3年4月、「谷風・小野川引分之図」、春英画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.27)／学研『大相撲』(p.36)。

南から見た図。弓具・艮柱（向こう右）、幣帛・乾柱。中改・描かれていない。谷風は左に、小野川は右に描かれている。

(14) 寛政3年6月、「谷風・小野川横綱土俵入」、春英画、『図録「日本相撲史」総覧』(pp.26-7)／『相撲百年の歴史』(p.11)。

南から見た図。弓具・乾柱（向こう左）、幣帛も一緒。中改・描かれていない。『相撲百年の歴史』(p.11)と『図録「日本相撲史」総覧』(pp.26-7)では寛政元年11月としている。力士名は寛政3年6月の番付と一致する。弓具と幣帛と一緒に結び付けてあるが、当時として例外的である。別々に結び付けたり一緒に結び付けたりすることに何か理由があったのかどうかは不明である。

(15) 寛政3年6月、「上覧相撲の絵巻」、堺市博物館制作『相撲の歴史』(p.39)。

南から見た図。弓具や幣帛は描かれていない。水桶は坤柱と艮柱の近くに置いてある。力紙は描かれていない。力士は対角線上の柱で口ゆすぎしたに違いない。水桶は対角線上に置いてある。勸進相撲でも水桶は対角線上に置いていただろうか。本稿ではそうではないと推測している。文政6年4月の上覧相撲の土俵を描いた絵図（相撲博物館所蔵／土屋喜敬著『相撲』の口絵〈12〉）では水桶は北側の左右の柱（乾柱と艮柱）に配置されている。参考までに、明治17年3月の天覧相撲では北側の左右の柱に水桶は置かれている（松本平吉著『角觥秘事解』の挿絵）。

- (16) 寛政年間（3年6月頃?）,「江都勸進大相撲浮絵之図」（雷電と陣幕の取組か）, 春好画, 学研『大相撲』（p.37）。
南から見た図。弓具・艮柱（向こう右）, 幣帛・乾柱。中改・2人（乾柱と艮柱〈両隣の柱〉）。坤柱にも座布団があるように見えるが、俵の色が濃くなっているだけ。
- (17) 寛政年間（3年6月頃?）,「雷電と陣幕の取組」, 春英画, 『相撲浮世絵』（p.54）。
南から見た図。弓具・艮柱, 幣帛・乾柱。乾柱と艮柱だけが描かれている。中改・描かれていない。
- (18) 寛政5年,「勸進大相撲土俵入之図」, 春英画, ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（p.96）/『どすこい』（p.33）。
北から見た図。役数あり。弓具・乾柱（手前右）, 幣帛・艮柱。中改・2人（乾柱と艮柱〈両隣の柱〉）で、巽柱と坤柱は不明。水桶は乾柱と艮柱近くにある。その2本の柱に力紙も結び付けてある。
- (19) 寛政5年3月頃,「土俵入り」, 春英画, 『相撲浮世絵』（pp.162-3）。
南から見た図, 弓具・艮柱（向こう右）, 幣帛・乾柱。中改・不明。行司・描かれていない。
- (20) 寛政6年11月, 怪童力士大童山文五郎の土俵入, 写楽画, 『相撲百年の歴史』（p.12）/ ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（p.29）/ 学研『大相撲』（口絵）。
南から見た図。弓具・坤柱, 幣帛・巽柱。中改・坤柱と巽柱〈両隣の柱〉。土俵入りでは正面（南）を向くのが普通。大童山は土俵入りをしているときのポーズである。土俵を下りるポーズではない。水桶と力紙が南の坤柱と巽柱に備えてあるが、これは構図上の工夫に違いない。本来は、北側の左右に備えてある。たとえば、寛政5年の錦絵「勸進大相撲土俵入之図」では北側に水桶は備えられている。谷風が西側に描かれていることを考慮すれば、大童山は南を向いているに違いない。
- ◎ 享和元年8月,「京都鴨川角舩図」, 文鳳筆, 学研『大相撲』の口絵/酒井著『日本相撲史（上）』（p.204）。この絵図は京都相撲を描いたものである。
北から見た図。役数はない。行司は北に踞りし、南を向いている。水桶が乾柱と巽柱〈対角の柱〉の近くに備えてある²⁰。力紙が乾柱に結び付けてある。勸進相撲で水桶と力紙が対角の柱に備えられていることから、参考までに提示してある。
- (21) 享和元年,「相撲金剛伝」（土俵正面之図）, 『どすこい』（p.34）。
南から見た図。弓具・艮柱（向こう右）。幣帛はいずれの柱にもある。四本柱は紅白柱。京都での勸進相撲。

(22) 文化元年冬、雷電と柏戸の取組、春英画、『相撲浮世絵』(p.71)。

北から見た図。役棧敷あり、弓具・巽柱(向こう左)、幣帛・坤柱。中改・1人(坤柱)。柱は2本だけで、長柱に中改がいるかどうかは不明。

(23) 文化3年10月、雷電と柏戸の取組、春英画、酒井著『日本相撲史(上)』(p.223)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・坤柱、幣帛・巽柱。中改・2人(巽柱と乾柱(対角の柱))。

◎ 文化3年10月以降、江戸相撲では水桶と力紙は北の左右の柱(乾井柱と長柱)に備えるようになっている。寛政4年から文化10年まで水桶と力紙の配置を確認できる錦絵がない。その期間中に柱の方位が決まったかもしれない。寛政4年以前、水桶と力紙を備える柱の配置は必ずしも定まっていない。しかし、享和元年の京都相撲では水桶と力紙は対角の柱に備えられている。

(24) 文化10年(月名不明)、幕内土俵入之図、英山画、『江戸相撲錦絵』(pp.17-9)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・乾柱(手前右)、幣帛・長柱。中改は2人(乾柱と長柱(両隣の柱))。他の2本には中改はいない(推定)。北の乾柱と長柱に力紙がある。水桶は両柱近くに見えない。

(25) 文化13年2月、「白川と竜門の土俵入り」、英山画、池田著『日本相撲史(上)』(p.246)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・不明、幣帛・長柱。中改・2人(長柱と乾柱(両隣の柱))。坤柱と巽柱にはいない。

(26) 文化13年2月頃(推定)、「新版浮絵勸進大相撲之図」、英泉画、『江戸相撲錦絵』(p.20)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・乾柱(手前右)、幣帛・不明。中改・2人(乾柱と長柱)で、坤柱にはいないが、巽柱にはいないはずだ(推定)。北の乾柱の近くに水桶がある。力紙も乾柱と長柱に結び付けてある。ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.112)では文政9年となっている。行司がその風貌から8代庄之助である。文化年間か文政9年より早い年月に描かれたかもしれない。

B. 中改が3人の錦絵

◎ 文化14年1月以降、中改が3人となる。

(1) 文化14年1月、「勸進大相撲興行図」、春英画、ビックフォード著『相撲と浮世絵

の世界』(p. 32)／酒井著『日本相撲史(上)』(p. 241)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・巽柱(向こう左)、幣帛・坤柱。中改3人(乾柱と艮柱と巽柱)で、坤柱は不明。北の艮柱には力紙が結び付けてある。

(2) 文化14年1月場所,「勸進大相撲興業図」(幕内土俵入り), 春英画,『相撲浮世絵』(pp. 21-3)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・巽柱(向こう左)、幣帛・坤柱。中改・3人(乾柱, 艮柱, 巽柱)で、坤柱は不明。北の艮柱に力紙がある。

(3) 文化16年, 立神と玉垣の取組, 柳谷筆, ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p. 109)／『江戸相撲錦絵』(pp. 14-6)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・乾柱(手前右)、幣帛・艮柱。中改・2人(艮柱と乾柱〈両隣の柱〉)で、坤柱にはいないが、巽柱は不明。北の乾柱と艮柱近くに水桶があり、その2本の柱には力紙もある。『江戸相撲錦絵』では文化13年2月となっている。

(4) 文政2年頃,「勸進大相撲興行図」(土俵入り), 春英筆, 学研『大相撲』(pp. 52-3)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・巽柱(向こう左)、幣帛・坤柱。中改・3人で、坤柱は不明。

(5) 文政6年10月, 小柳と四賀峯の取組, 春亭画,『江戸相撲錦絵』(pp. 29-31)／ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p. 112, 69図)。

南から見た図。弓具・乾柱(向こう左)、幣帛・艮柱。中改・描かれていない。北の乾柱近くに水桶がある。

(6) 文政8, 9年, 源氏山と四賀峯の取組, 英泉補画, 学研『大相撲』(pp. 52-3)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・乾柱(手前右)、幣帛・艮柱。中改・2人(艮柱と乾柱〈両隣の柱〉)で、艮柱は不明。水桶が北の乾柱と艮柱近くにある。力紙もその2本の柱に結び付けてある。

◎ 文政12年春場所以降, 出掛けが艮柱と坤柱になったかもしれない。実際は、艮柱が圧倒的である。さらに、弓具と幣帛をともに括るようになったのもこれ以降である。別々に描いてある錦絵はまれである。

(7) 文政12年春場所,「勸進大相撲興行之全図」, 国貞画,『相撲浮世絵』(pp. 162-3)／酒井著『日本相撲史(上)』(p. 283)。

南から見た図。弓具・艮柱（向こう右）、幣帛も一緒。中改・2人（坤柱と巽柱）で、他の2柱は不明。

(8) 文政13年11月、「稲妻と阿武松の取組」、国貞画、『相撲百年の歴史』(p.14)。

南から見た図、弓具・艮柱（向こう右）、幣帛も一緒。中改・描かれていない。渦ヶ州は蜜ヶ関から改名していることから、文政13年11月の錦絵である。

- ◎ 天保4年(1833)、回向院定場所となる。天保年間には土俵の四本柱を描いてある錦絵は少ない。本場所が固定しているので、土俵の方位にも変更はなかったはずだ。

(9) 天保10年11月、「勸進大相撲の図」（不知火と平岩の取組）、国貞画、『江戸相撲錦絵』(p.74)。

南から見た図、弓具・艮柱（向こう右）、幣帛も一緒。中改・描かれていない。

(10) 天保14年10月、「勸進大相撲取組之図」（不知火と剣山の取組）、国貞画、『江戸相撲錦絵』(p.97)。

南から見た図、弓具・艮柱（向こう右）、幣帛も一緒。中改・1人（艮柱）。中改の数は不明。土俵が一部（乾柱と艮柱）しか描かれていない。北の艮柱に力紙が結び付けてある。

(11) 天保14年10月、「勸進大相撲顔触れ之図」、国貞画、『江戸相撲錦絵』(p.97)。

南から見た図、弓具・艮柱（向こう右）、幣帛も一緒。中改・1人。中改の数は不明。土俵が一部（乾柱と艮柱）しか描かれていない。北の乾柱に力紙が結び付けてある。

(12) 弘化2年11月、「勸進大相撲土俵入之図」、豊国画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.48)／『江戸相撲錦絵』(pp.142-3)。

北から見た図。役棧敷あり。弓具・艮柱（手前左）、幣帛も同じ柱。中改・3人（乾柱と艮柱と巽柱）。巽柱には座布団の一部が描かれている。中改がいたことが推測できる。坤柱に中改がいたかどうかは不明。したがって、中改が4人いたかどうかは不明。北の艮柱に力紙がある。

- ◎ ここまでが中改3人を確認できた。

C. 中改が4人の錦絵

- ◎ 弘化3年3月以降、中改は4人になっている。本当にこの年、変わったのか、

それを文書資料でも確認しなかったが、そういう資料を見つけれなかった。

- (1) 弘化3年3月、「勸進大相撲興行之図」（秀ノ山と小柳の取組み）、豊国筆、『大江戸大東京資料目録〈附・大相撲資料〉—浅草御蔵前書房古書目録第2号』（p.41, 昭和56年〈1981〉7月, 浅草御蔵前書房発行）／国会図書館デジタル化資料の古典籍資料1（貴重書等）。
北から見た図, 弓具・艮柱（手前左）、中改・4人。錦絵では「秀の山」と記載されている。
- (2) 嘉永元年11月場所、「勸進大相撲土俵入之図」、豊国画、『相撲百年の歴史』（pp.16-7）。
北から見た図。役数あり。弓具・艮柱（手前左）、幣帛も一緒。中改・3人（1人は座布団から推測）。巽柱の中改は不明だが、力士の背後にもう1人いたはず。力紙は艮柱と乾柱に結び付けられている。なお、同年月、同絵師、同画題の錦絵があり（埼玉県立博物館編『特別展図録「相撲」』（p.5）、それには東西の力士名が記されている。力士の並び方や水引幕の模様や画題表示の位置なども異なることから、二つは異なる錦絵である。
- (3) 嘉永2年2月、「勸進大相撲取組図」、豊国画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（p.137）。
北から見た図。役数あり。弓具・艮柱（弓は見えないが、扇子から推測）。中改・4人。
- (4) 嘉永2年2月、「勸進大角力取組図」（小柳と常山の取組）、芳虎画、『江戸相撲錦絵』（p.76）。
北から見た図。役数あり。弓具・艮柱（手前左、推定）、幣帛も一緒。中改・4人。
- (5) 嘉永2年／3年、「東都両国回向院境内相撲の図」、廣重画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（p138）／『図録「日本相撲史」総覧』（pp.22-3）。
北から見た図。役数は見えない。弓具・艮柱（手前左）、幣帛・乾柱。中改・4人。弓具と幣帛が別々の柱に飾っており、当時としては珍しいケースである。水桶が北の艮柱と乾柱にある。『江戸相撲錦絵』（p.116）では弘化年間となっている。弘化4年末から嘉永5年の間で、確かな年月は不明。
- (6) 嘉永2年11月、「勸進大相撲興行之全図」（土俵入り）、国芳画、『江戸相撲錦絵』（pp110-2）。
南から見た図。弓具・艮柱（向こう右）、幣帛も一緒。中改・3人で、艮柱は不明。

- (7) 嘉永3年3月、「勸進大相撲土俵入之図」、国芳画、『相撲浮世絵』(p.58-9)。
南から見た図、弓具・不明、幣帛も不明。中改・3人で、乾柱は不明。
- (8) 嘉永3年3月、「勸進大相撲取組之図」(鏡岩と小柳の取組)、芳虎画、『江戸相撲錦絵』(pp.98-9)。
北から見た図。役棧敷あり。弓具・艮柱(手前左)、幣帛も一緒。中改・4人。北の乾柱近くに水桶がある。乾柱と艮柱には力紙もある。
- (9) 嘉永4年2月、「大相撲土俵入之図」(鏡岩と小柳の取組)、芳宗画、『図録「日本相撲史」総覧』(pp.30-1)／『江戸相撲錦絵』(p.77)。
北から見た図、弓具・艮柱(手前左)、幣帛も同じ柱。中改・4人。北の乾柱近くに水桶がある。その乾柱と艮柱には力紙がある。
- (10) 嘉永6年11月、「勸進大相撲之図」、豊国画、『江戸相撲錦絵』(pp.144-5)。
南から見た図。弓具・艮柱(幣帛の一部から推測)。中改・4人(1人は座布団から推測)。土俵の半分しか描かれていない。4本の柱はあるが、2本は一部しか描かれていない。
- (11) 嘉永年間、「両国大相撲繁栄之図」、国郷画、『相撲浮世絵』(pp.7-9)／ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(pp.50-1)。
南から見た図。弓具・不明。幣帛・不明。乾。中改・4人。
- (12) 安政2年2月、「勸進大相撲之図」、芳員画、学研『大相撲』(pp.122-3)。
北から見た図。役棧敷あり。弓具・不明、幣帛・艮柱にあるのみ。弓具も艮柱かもしれない(推定)。中改・4人。
- (13) 安政3年11月、「勸進大相撲取組之図」(雲龍と黒岩の取組)、国貞画、『相撲浮世絵』(pp.45-7)／金指基著『相撲大事典』(p.252)。
北から見た図。役棧敷あり。弓具・艮柱(手前左)、幣帛も同じ柱、中改・4人。北の艮柱に力紙が結び付けてある。
- (14) 安政4年冬場所、「境川と雲龍の取組」、芳盛画、『江戸相撲錦絵』(p.62)。
北から見た図。役棧敷あり、弓具・坤柱(向こう右)、幣帛も一緒。中改・4人。柱は2本(坤柱と巽柱)のみ描かれている。

◎ 安政5年1月場所以降、四本柱は基本的に四色である。ときどき紅白柱も見られる。拙著『大相撲行司の松翁と四本柱の四色』(2020)の第6章「四本柱の色と

相撲の種類」では明治24年あたりから明治42年6月までの四本柱について述べてあるが、安政5年から明治24年までの四本柱については体系的な研究をしていない。